

スウィフトの生涯 (XI)

アイルランドにおける農作物の不作から
マーケット・ヒル訪問まで (1726 — 1729)

三 浦 謙

1726年8月15日ロンドンを立ったスウィフトは7日かかりでダブリンの牧師館に着いた。ダブリンへのスウィフトの帰還は8月23日のダブリン・ガゼット紙⁽¹⁾に報ぜられ盛大な歓迎をうけた。どの往来にも篝火が焚かれて鐘が打ち鳴らされ、町という町が「ドレイピア万歳」の歓呼で沸き返った。

だが、スウィフトは素直には喜べなかった。スウィフトには気がかりな点が二つあった。一つは1720年代後半アイルランドを見舞った干ばつであり、もう一つはステラの病状である。

1720年代後半のアイルランドは前半と違って日でりが続き農民は作物の不作に悩まされた。とくに、1726年はひどい不作で1720年代を通じて穀物の輸入量は最大になった。だが穀物の国内価格は急騰するばかりで、一般の庶民にはパンも手に入りにくく冬場に備えて蓄えてある馬鈴薯もおおむね底をつくありさまだった。キング大主教は同年5月から9月にかけてロンドンでスウィフトと共にアイルランドの現状を訴えたが、ロンドンの高官で耳を藉す者はなかった。

スウィフトがダブリンに戻った時、一番の気がかりはステラの病状だった。1726年7月トウィカナムのポープ宅に寄寓していた折ジョン・ウォロール師からすでに知らせを受けていたので、ステラの病が進んでいることは心得ていた。同年7月15日スウィフトはウォロール宛の書信で次のようにいっている。

あなたがおしえてくださるステラの病状はこれまで長い間私が予期

していたことで憂うつでなりません。私たちはこれまで35年間申し分のない友人でした…ステラとディングレー夫人のどちらが他界しても私の余生は重苦しいものとなりましょう…神に召されるまで私は惨めな生活をズルズル送る外ありません…

どうか毎週便りをください。どんな手をうつべきか心得ておきたいのです。アイルランドへは行かないことにしました。彼女の死に顔や臨終の姿を見たくないのです…この手紙を2度読んだらどうか焼き捨ててください。そして私がいったことはすべて、あなたの胸の中にだけ納めておいてください⁽²⁾。

同年7月20日ジェイムズ・ストップフォード師⁽³⁾宛の手紙でもステラのことに触れている。ここではステラがかけがえのない友人であった⁽⁴⁾といってから、

はげしい友情のほうがはげしい恋愛よりも長続きするし、はげしい恋愛と同じように魅力あるものです⁽⁵⁾。

といって手紙を結んでいる。

1週間後の7月27日付のシェリダンへの書信では、

ステラの病状は私にとって最大の関心事です。どんな心の備えをしても哲学者のように耐えられそうもないし、クリスチャンらしい態度で終始できそうもありません⁽⁶⁾。

といって、ステラと親しかったシェリダンに素直に心境を打ち明けている。

前述の7月15日付のウオロールへの手紙で述べているようにスウィフトはこのさいアイルランドに戻らないつもりだったが、8月6日の同じくウオロール宛の書信では8月15日月曜日ロンドンを立ってアイルランドに向うといっている。シェリダンからの勧めがあったからである。

そして、この手紙での予告通りスウィフトは8月15日にロンドンを立って8月22日ダブリンに着いた。以後、翌年4月9日ロンドンに向うまで約8ヶ月間ダブリンに滞在するが、この間のステラとの事情は詳らかで

ない。ステラの病いは快方に向って一時小康状態を保ったようである。1727年4月8日、ロンドンへ立つ前日、トーマス・ウオーリス師⁽⁷⁾宛の書簡で6ヶ月間の留守中主教の視察のさいは代理を勤めて欲しいと頼んだ上で、ステラとディングレー夫人が夏の間は牧師館にいるから世話をしてもらおうようにといている。ステラが健康をとりもどしていた証拠であろう。

ところが、ロンドンへきてほゞ1ヶ月後ステラが風邪をこじらせて病状が思わしくないという報せをシェリダンから受けとったスウィフトは5月13日のシェリダン宛の手紙で、「私としては予期していなかったことです…彼女は平素は田舎に住んで、時折り町に出るようにしてほしい」⁽⁸⁾と願っている。同年8月29日の同じくシェリダンに出した書信では「あなたが私のこの手紙を読む前に、私にとって最悪の報せをあなたから受けとっているかもしれません」⁽⁹⁾といている。最悪の報せとはもちろんステラの死である。この時期スウィフト自身の目まいとツンボがひどく、2日治まっていただけで症状は悪くなるばかりだった。スウィフトは「今、神に召されば、真底満足なのですが」⁽¹⁰⁾と訴えている。

9月12日ロンドン発信のウオロールへの書簡では「郵便を受け取るたびにステラの死の報せではないかと思ひます」⁽¹¹⁾と重苦しい不安な気持ちを素直に語っている。スウィフトはとうとう思い余って9月18日月曜日ロンドンを立ってホーリーヘッド経由でダブリンへ向った。ウェールズ最大の港であるホーリーヘッドに着いたのは9月24日である。ところが生憎の嵐で1週間船が出なかった。その間、昼間は同行の従僕ワットを連れて岩場を歩いたりホーリーヘッドという小高い山の頂きに登ってウイックロウ⁽¹²⁾の丘陵を眺めやったりしたが夜をもて余した。昼間は短かく夜は就寝前5時間の余裕があった。ローソクの灯りでは本は読めない。農民や店員を話し相手にしようにも彼らに英語は通じなかった。

従僕ワットはお人好しの愚物で、馬鹿の阿呆のといわれても根にもつ男ではなかったが、彼のヘマは歴史に留めるに値するとスウィフトは大仰にいている。ワットはスウィフトの汚れた下着を旅行カバンに入れて途中の宿舎で洗うという才覚もなかった。ロンドンを出る時にはスウィフトは着更えの下着を6枚もっていたが、出発して8日目で、スウィフトの下

着の着更えは全くなかった。きれい好きのスウィフトにははなはだこたえた。

ホーリーヘッドでスウィフトは丁重に扱われたわけでもなかった。食事はまずいし宿舎の煤けた部屋は牧師館の納戸よりも狭く、ワットがスウィフトの名前をおしえても定期船の船長の態度はぞんざいだった。

スウィフトは宿舎にいるときは小さな手帳に日記をつけたり詩を書いたりして時を過したが、それにしてもホーリーヘッドでの一日は長かった。一日が一週間に思えたし、天気が悪い時は二週間にも思えたスウィフトは知っている。

こうしてスウィフトは天候の回復をまって10月1日か2日ホーリーヘッドで乗船しカーリングフォード⁽¹³⁾に向った。カーリングフォードはダブリンから60マイルのカウンティ・ラウス⁽¹⁴⁾にある海港である。カーリングフォードからは駅馬車で10月4日ダブリンに着いた。

以後ステラの死に到るまでの約4ヶ月間スウィフトは友人との交信でステラのことに触れていない。スウィフトは秘かにディングレー夫人と共にステラを牧師館の近くに住まわせステラの病いの回復をひたすら神に祈った。

だが、快癒が望めないと知ったステラは12月30日内容、形式ともスウィフトの意向を汲んで遺書を作った。遺産は当時存命でファーンハム⁽¹⁵⁾に住まっていた母親のモース夫人⁽¹⁶⁾と妹のアンに与えることにした。2人が死亡したさいにはダブリンに建設中であったスティーヴンズ・ホスピタル⁽¹⁷⁾のチャップレンの俸給に当てることにした。遺産が二次的な意味にせよこのような用途に向けられたのはスウィフトがスティーヴンズ・ホスピタルの慈善資金担当の理事であったこととか、当病院の中心人物の一人で傑出した外科医であったトーマス・プロビー⁽¹⁸⁾が夫妻ともステラの親しい友人であったことが関わっていた。遺産管理人はトーマス・シェリダン、ジョン・グラッタン⁽¹⁹⁾、フランシス・コルベット⁽²⁰⁾、ジョン・ロックフォルト⁽²¹⁾といったすべてスウィフトとは昵懇の人たちだった。スウィフトに遺されたのはスウィフトからの手紙と思われる書類を納めた小金庫とオノリア・スワントン夫人⁽²²⁾に使ってもらうよう託された30ポンドの証券だった。生涯かけがえのない話し相手として生活を共にしてきたレベッ

カ・ディングレー夫人には鎖つきの時計と 20 ギニーを遺し、下僕にはステラが死亡した時点での給与に加えて半年分の給与を上乗せして与えることにした。署名はエスター・ジョンソンで、ステラは自分の身分を遺書の冒頭で、ダブリン市の未婚婦人としている。

こうして遺書を書き終えた翌月の 1 月 28 日、日曜日夕刻 6 時、ステラは最後の息をひきとった。ダブリンの牧師館では毎週日曜日、晩餐会が開かれた。スウィフトが客を饗応していると、8 時頃下僕がメモを携えてステラの死去を報せにきた。スウィフトはこの日があるのを覚悟していた。前年の 12 月上旬、さる旧友の未亡人であるムーア夫人⁽²³⁾が子供を亡くした時、スウィフトは弔慰文に次のようなことを書いて自身心の備えをしていた。

人生は私たちが暫く観客となり、自らもその中で一つの役割を演ずる悲劇です。自己愛が私たちすべての行動を動機づけているだけに私たちの悲哀の唯一つの淵源にもなります⁽²⁴⁾。

スウィフトは下僕からメモを受け取ってもいつもの日程を変えなかった。11 時過ぎ客を送り出してから自室にこもってステラの思い出を書きだした。28 日、29 日、30 日で $\frac{3}{4}$ を書き上げ、その後余暇を見つけては残る $\frac{1}{4}$ を書き足していった。

だが、約 4000 語からなるこの思い出の記はスウィフトの作物の中で上乘の作とはいいい難い。ステラの人なりを伝える 2, 3 のエピソードの外は大方はありきたりの賛辞で側々と心打つものがない。

スウィフトはステラについてこんなエピソードを伝えている。ステラが 24 の時だった。ステラの家が強盗が入った。ステラは怯えることなく黒い頭巾を被ってダイニング・ルームの窓に近寄り、ピストルで強盗を狙い撃ちした。弾は命中し強盗は翌朝死んだ。かねがねステラを高く評価していたオーモンド侯はこの一件があってから、宴会でステラと顔を合せると病気がちな彼女の健康を願って盃を交した。

アイルランドで初めてステラに紹介されたアディソンはすぐステラが尋常でないことをみてとり、できることなら彼女との友情を深めたいとスウィフトに語った。

ステラはいつも間借り住まいで、下僕は下女が 2 人に下男が 1 人だった。下男も下女も心からステラを慕っていた。

ステラは贈物を貰うのは好まなかったが贈物をするほうは好みだった。スウィフトと知り合ってから贈物の総額は数百ポンドは下らない。

病弱なため、めったに人の家を訪ねることはなかったが、よく来客があった。リンゼイ首座主教⁽²⁵⁾、ロイド主教⁽²⁶⁾、アッシュ主教⁽²⁷⁾、ブラウン主教⁽²⁸⁾等宗教界の要人が多かった。

ステラは土地の人間以上にアイルランドを愛した。スティーヴンス・ホスピタルに 1,000 ポンドの寄附を考えたのもアイルランドに尽したいというステラの気持のあらわれだった。

ステラの葬儀があった 30 日の火曜もスウィフトはこの追憶を書き綴っており、病気を理由に葬儀には出なかった。

ステラの葬儀の前後、スウィフトはツンボと目まいの業病で苦しんでいた。ステラが死んだ翌月、ベンジャミン・モットへの手紙でスウィフトは慢性の持病で 10 週間身動きができないといっている⁽²⁹⁾。ステラの没後、友人知己への書簡でスウィフトはステラのことには全く触れていない。

スウィフトの死後、机の中に一房のステラの髪がしまってあった。包み紙には「ある女性の髪」と記してあるだけだった。

スウィフトの健康を憂慮したポープはこの時期保養のためエクストラシャペル⁽³⁰⁾に行くようスウィフトに勧めている。だが、病に加えて外国語が苦痛なためスウィフトはポープの勧めに従わなかった。

健康がすぐれないため、スウィフトは以後イングランド訪問も思い止まるようになる。1728 年 2 月のモットへの書信で、健康が許せば、夏ロンドンへ行くようにいっているが、これは実現しなかった。スウィフトにとって 1727 年のロンドン訪問が最後のイングランドへの旅になった。

ステラが死んだ翌日、ゲイの『乞食オペラ』⁽³¹⁾ がロンドンで上演された。『乞食オペラ』の制作にさいしてスウィフトはゲイにあらかじめニューゲイト監獄⁽³²⁾を訪ねるように勧めるなどいくつかのヒントを与えたといわれている。上演後、半月を経過した 2 月 15 日ゲイはスウィフトに次のような朗報を伝えている。

リンカンズ・イン・フィールズ⁽³³⁾の芝居小屋で『乞食オペラ』が上演されています。大成功で毎晩大入りです。今夜が15日目ですが、あと2週間は続くと思います。お手元に台本を送るようモットにお願いしました…切符の押し売りをしたわけではありませんが600ポンドから700ポンドの収入にはなると思います⁽³⁴⁾。

ところが、5週間経っても観客は減らなかった。当時芝居の上演日数は通常6日だったので、これは文字通り大成功だった。結局、最初のシーズンで『乞食オペラ』は62回公演された。これはロンドンでの公演回数では嘗てない記録だった。

ダブリンでも好評で、5月にはすでに20回公演されていた。『乞食オペラ』ではカータレットを左遷したウォルポールが槍玉に上げられていた。そのせいか、アイルランド総督のカータレットも何度か劇場に足を運んでは大笑したという。

だが、政界や宗教界の要人をスリや盗人や淫売婦と同一視する『乞食オペラ』に批判の声が挙がらぬわけはなかった。王家のチャップレンで、後カンタベリー大主教になったトーマス・ヘリング師⁽³⁵⁾などは盗人、酔漢、などを奨励するといって『乞食オペラ』を非難する説教を行った。そこでスウィフトは1728年5月25日の『インテリジェンサー』⁽³⁶⁾第3号⁽³⁷⁾でおおよそ次のように『乞食オペラ』を弁護した。

最も有効で最も人を怒らせることの少い諷刺にとって最高の滋養はユーモアである。どんな心性の人間にユーモアがあるかは哲学者が論ずる問題かも知れないが、ウィットより好ましいこの気質は人間に生来具っているので知識人や学識者に限られるわけではない。下僕やごく下層の人間ももち合わせていて、ただ、彼らがその点に気づいていないだけである。『乞食オペラ』はこのユーモアに優れている。だからこそ、ロンドンでもダブリンでも大成功を収めたのだ。ユーモアは人を攻撃する代りに、人を笑わせてその愚行と悪徳を矯正する。ユウエナーリス⁽³⁸⁾よりホラチウス⁽³⁹⁾が好まれるのもこのユーモアのせいである。

『乞食オペラ』のユーモアはすべての悪を明るみに出す全く新しいもので、宗教上および道義上大きな貢献をしている。ゲイ氏はこの劇でさる大官を誹謗した疑いをかけられているが、これは一部の悪意ある者の曲解である。

特定の党派への卑屈なまでの愛着、憐れむべき愚鈍、誤った熱意、念の入った偽善等に蝕ばまれた人間がこの卓抜な喜劇を非難するというのが私の率直な見解である。

こうして、スウィフトは『乞食オペラ』の制作にあたって助言を与えたばかりでなく、制作後の論難にさいしては進んで弁護の筆を執った。

1728年5月18日にはポープの『ダンシアッド』⁽⁴⁰⁾が上梓された。『ダンシアッド』制作にまつわるこんな話が伝わっている。ポープが気に染まないで、この戯詩の最初の草稿を煖炉に投げこんだところ、スウィフトが焦げた詩稿をさっと取り出してポープに書き続けるよう勧めたという。ポープはこの話を『ダンシアッド』の自作の注に添えている。

ポープはまたシェリダンへの手紙で、ツンボで苦しむスウィフトのもとめがなければ『ダンシアッド』は日の目を見ることはなかったといっている⁽⁴¹⁾。スウィフトの耳の障害のため、トウィカナムで思うように2人は会話が楽しめなかった。そこで、やむなくポープが対句からなるこの戯詩を書いたのだという。

ところが、スウィフトが匿名の『ダンシアッド』を手にした時、スウィフトにわからないあてこすりが数多くあったので、ポープに詳細な注をつけるように促した。スウィフトの要望にこたえて、まもなく『ダンシアッド』の集注本が出た時、ポープは手紙でスウィフトに次のようにいっている。

謝辞がこんど『ダンシアッド』に挿入されます。この戯詩がどれほどあなたに負っているか私が申し上げてよろしいでしょうか。あなたがいなければ、この作品は決して生まれなかったのですから⁽⁴²⁾。

スウィフトへの謝意は『ダンシアッド』第1篇にポープ特異のアイロニカルな賛辞で次のように盛られた。

あゝ！どんな肩書があなたの耳を喜ばせることか。
主任司祭かドレイピアかビッカスタッフかそれともガリバーか！
あなたはセルバンテスの真摯な風姿を望まれるのか。
ラブレーの安楽椅子で軀を揺がせて大笑なさるおつもりか。

.....
それともあなたが住まう歎かわしい国土の銅の鎖の縛めを解こうとな
さるのか。 (19—24)

ポープは「スウィフトとの友情を不朽にするために『ダンシアッド』を書いた」⁽⁴³⁾ とスウィフトに語った。その上、セルバンテスとラブレーというスウィフトの敬愛する2人の文人を引き合いにだしての謝辞をそこに盛りこんだ。スウィフトはご満悦であったに違いない。

『ダンシアッド』の初版が5月に出た時、ポープはその序文に次のような文句を入れた。「これまで過去2ヶ月間、毎週、ポープ氏の著作ばかりでなくポープ氏の人となりをも攻撃するパンフレットや広告や書信や週報が町に溢れた。」ポープは巧みな宣伝マンでもあった。こうした逆効果を狙った宣伝が利いて『ダンシアッド』への関心はいやが上にも高まり、11ヶ月で6版を重ねた。

1727年7月アイルランド総督に再任されたカータレットが1727 / 8年の冬ダブリン大学の教授の任用について特別研究員⁷の地位にある者に意見をもとめたことがあった。彼らは教授は特別研究員から選出されるべきで、特別研究員でなくなれば自動的に教授も解任されるようにすべきだという見解を出した。スウィフトはこのような動きに反対してカータレットに次のような手紙を送った。

閣下、そのような慣行がヨーロッパの大学の慣例にいかに逆行するかお知らせする必要はないと思います。ご存知の通り、最近2世代の学識者の多くは国王の招きでそれぞれ専門の芸術もしくは科学の教授になりました。オックスフォードおよびケンブリッジもその例になっております。特別研究員職を改変して、教授職を汚すことにしかない偏狭な意見に閣下が与することがないようにお願いいたしたくぞんじます⁽⁴⁴⁾。

スウィフトは学内の一部門からではなく、広く内外に目を向けて有能な学究を教授に迎え入れることを望んだのである。

ところで、アイルランド一般の状況は一向に改善されなかった。その理由の一つはアイリッシュの自己破壊的な性情にあった。スウィフトは「アイルランド」⁽⁴⁵⁾ という詩の中で、

祖国が危機に瀕している時も

争いのための争いばかりやっている

(7—8)

といて歎いている。

1728年春からスウィフトは再びアイルランド情勢について活発に筆を揮うようになる。その皮切りである「アイルランド寸言」⁽⁴⁶⁾ はドレイピアの第一書簡と同じ体裁で3月19日にサラ・ハーディング⁽⁴⁷⁾の手で匿名で発刊された。アイルランドの国会議員を主に対象にして書かれた「アイルランド寸言」でスウィフトは「アイルランド製品全面利用への提案」の場合と同じく悲惨な現状を述べ、ドレイピア事件終結後も相変らずイングランドへの隷従を断ち切れず自国製品の輸出を禁制されている腑甲斐なさを憤っている。ポープがこの時期のスウィフトを愛国者だというと、スウィフトはこの言葉を斥けて「私は激しい怒りからモノを言っているだけだ」⁽⁴⁸⁾ といい返している。繁栄に必要な自然条件を具えているのにアイルランドが貧困なのはイングランドの政治的な圧制の外にアイリッシュの怠慢に一半の責任があったからである。スウィフトはイスラエル人が「藁なしで煉瓦を作らなければならなくなりました」と訴えてきた時、神の選民を迫害していたファラオが「おまえたちが怠け者だからだ。おまえたちが怠け者だからだ」と再度はげしく叱責してイスラエル人を退らせたという話を「アイルランド寸言」で引合いに出し、アイリッシュへの戒めとしている。

「アイルランド寸言」発刊後間もない3月25日にサー・ジョン・ブラウン⁽⁴⁹⁾なる人物の現状分析に答えてスウィフトが公けにした一文⁽⁵⁰⁾ではアイルランドの農民の怠惰や牧畜業の問題点等をさらに刻明に指摘している。農民は怠惰と無知と貧困から肥料もやらず地力の回復もまたずに耕作を重ねるので土地は疲弊するばかりであった。農地の借用期限が間近かに迫る

と地主が契約を更新しないことを知って農民が牧草地まで耕すので地主の多くがかなりの損害を蒙った。

このことがあって、農地の借用期間が切れかかると牧畜業者が農地を買い占めるようになった。こうして有力な牧畜業者は労せずして百人の農民の生活権を奪ったのである。

それに驚くべきことは金がなくパンが乏しく飢餓や国外流出で人口が減少しているのにひきかえ牧畜向けの羊や黒牛が増加しているのに獣肉が法外に高く価格規制がないことだった。これは法律の欠陥だとスウィフトは指摘している。

そして、食糧不足を補うために 10 万バレルの小麦を輸入するようというサー・ジョン・ブラウンの提案をアイルランドの実情を知らない者の粗雑な意見としてスウィフトは斥けている。1 バレル 20 シリングと見積っても、これだけの小麦を買う金は当時のアイルランドにはなかったからだ。

スウィフトはこれまで身の危険を顧みることなく「アイルランド製品全面利用への提案」「ドレイピア書簡」「アイルランド寸言」サー・ジョン・ブラウンの「覚え書きへの回答」等でアイルランドの実情を訴えてきた。だが、一向に実効がなく現状では農民と労働者と貧しい手工業者の半ばが国外逃亡するか乞食になるかのいずれかである。スウィフトはここで「私は賢人ぶるつもりはない……これからは彼らの災難を嘲い恐怖に脅える姿を愚弄するのだ。」⁽⁵¹⁾ といっている。スウィフトのこのあからさまな呪詛は「つつましやかな提案」⁽⁵²⁾ という恐るべき貧民救済案となって具体化する。

だが、ここで、「つつましやかな提案」に話を進める前に 2, 3 の問題に触れなければならない。

まず、1728 年 5 月に発刊された週刊紙「インテリジェンサー」に今一度話を戻したい。この 5 号および 7 号にスウィフトの伝記上はなはだ興味深い挿話がのっている。それは「牧師の運命」⁽⁵³⁾ と題する一文である。ここで、スウィフトはコルソーデス⁽⁵⁴⁾とユーゲニオ⁽⁵⁵⁾というオックスフォード出身の 2 人の牧師の生きざまを対比させている。コルソーデスは百姓の悴で在学中は祈祷も講義も決して休まず、自室に 10 時間こもって靴下のほころびをかがるのが名人芸だった。酒は他人の金で飲み、同じガウンを 5

年間着てもかぎ裂き一つ作らない。芝居の台本を開いたり詩集を繙くこともなく、決して冗談を解せず、いささかもウィットがない。極端な俚約家で教区牧師になってからというものの牧師補に払う給与はギリギリの最低額で、その一部は聖餐式に寄進された浄財からひねり出す有様だった。宮廷、議会、高官の腐敗は、意に介することなく権力者に取り入ることが巧みなコルソーデスはトントン拍子で僧界の階段を昇りつめてゆく。

これにたいして、良家の出でコルソーデスとほぼ同じ頃オックスフォードを出たユーゲニオは詩才があって古代の作家に親しみギリシャ語およびラテン語に通じている。それに学業を怠けたわけでもなかったが、自作の詩の中で、さる聖職者を当てこすったとか、ダンス・パーティで踊っているところを人に見られたとかいうかどで、コルソーデスが貰っていたフェロー・シツプ特別研究資金をユーゲニオは貰えなかった。卒業後さる教区のレクター読師になるとオックスフォード時代の友人に同行して当時機知諧謔を好む連中の溜り場になっていたウिल्ズ・コーヒー・ハウス⁽⁵⁶⁾に足繁く通った。説教は拔群にうまく彼の詩友がしばしば彼を高官に推輓したが栄達も隷従と変らないとして折角の好意をも頑なに拒んだ。結局、年30ポンドのダービー州の牧師補になり、45歳になってから年50ポンドでリンカン州の僻村の教区牧師に収まった。

コルソーデスとユーゲニオにそれぞれスウィフトの分身がみられるが、聖職者としてのスウィフトはコルソーデスでもユーゲニオでもなかった。スウィフトはコルソーデスのように極めて節儉に努めたが大官におもね阿ることは潔しとしなかった。ユーゲニオのように詩作の嗜みがありコーヒー・ハウスでの談笑を好んだが、僻村の田舎牧師で生涯を終えることはなかった。当時の宗教家がコルソーデス型とユーゲニオ型に2分されていたとすれば、スウィフトは聖職者としてまことに異質な存在であった。

ところで、スウィフトはこの時期、アーマー⁽⁵⁷⁾に程近いマーケット・ヒル⁽⁵⁸⁾を訪れ、アーサー・アチソン卿⁽⁵⁹⁾宅に長期滞在している。アーサー卿はスコットランド系の貴族で、スウィフトの知人でアイルランドの大蔵大臣を勤めたフィリップ・サヴェイジ⁽⁶⁰⁾の跡とり娘アンを妻に迎えていた。アンは知性的な女性でスウィフトとの会話をとりわけ好んだ。夫妻には7人の子供があった。スウィフトの雑筆「若き女性への書簡」⁽⁶¹⁾はアンの子供

人の一人であるデボラ・ロックフォート⁽⁶²⁾に宛た手紙である。

アーサー卿はスウィフトと同じくダブリンのトリニティ・カレッジの卒業生で生来勤勉であり古典に造詣が深かった。5代目の準男爵で、1727年以来下院議員を勤めていた。

スウィフトはマーケット・ヒルが気に入っていた。アチソン夫人の読書の相談相手になったり庭木の手入れをしたりしてスウィフトは寛いだ生活を送っていた。1728年8月2日のシェリダンへの手紙で、「ダブリンはウンザリです。アチソン夫人が手厚くもてなしてくれるので、当地での田舎の暮しがたいへん気に入っています」⁽⁶³⁾ といっている。それにアーサー卿の勧めもあって長期滞在するつもりになったのであろう。ダブリンで留守を守る家政婦のブレント夫人に12ギニー⁽⁶⁴⁾の金とかつらと新しい乗馬服と法衣を送らせるようシェリダンに頼んでいる。結局このたびのスウィフトのマーケット・ヒル滞在は延び延びになり翌年の2月6日迄ダブリンに戻らなかった。

この間、邸の中であってスウィフトは時折り戯詩を作って打ち興じることもあった。今日その一つで「サンザシの古木を伐り倒して」⁽⁶⁵⁾ という座興の詩が残っている。スウィフトに伐り倒された樹齢数百年のサンザシが伐採の首謀者であるスウィフトとアチソン夫妻にうらみがましい繰言⁽⁶⁶⁾を重ねるはなしだが、スウィフトの軽妙な詩句のおかげで、アチソン夫妻の邸前のサンザシの古木は長く後世にその名を留めることになった。

注

(1) *The Dublin Gazette*.

(2) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 141.

(3) James Stopford (c. 1697–1759). Finglas の教区牧師で、後 Cloyne の主教になった。

(4) 5日前のウオロール師宛の手紙ではステラとの友情は35年続いているといい、この書信では33年といっている。スウィフトの数字はしばしば曖昧である。

(5) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 145.

(6) *Ibid.*, P. 147.

(7) Thomas Wallis (c. 1672–1750). Achonry の Archdeacon で St. Patrick's School の教師。

- (8) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 207.
- (9)(10) Ibid., P. 234.
- (11) Ibid., P. 237.
- (12) Wicklow. アイルランド共和国東部の州。フランシスコ派の修道院と12世紀の城廓の廃墟がある。
- (13) Carlingford.
- (14) Co. Louth.
- (15) Farnham. Surrey 州にある Moor Park の近傍。
- (16) Mrs. Bridget Mose. 生歿年未詳。
- (17) Steevens' Hospital. ダブリンの医師 Richard Steevens (1653-1710) が主に私財を投じて建てた病院。病院は1733年に完成。スウィフトは最も初期の理事の一人だった。
- (18) Thomas Proby (1665-1729).
- (19) John Grattan (d. 1754). Clonmethan の参事会員。
- (20) Francis Corbet (1688-1775). 後年, St. Patrick's の首任司祭になる。
- (21) John Rochfort (c. 1692-c. 1770). アイルランド Ballyshannon 州選出の下院議員。
- (22) Mrs. Honoria Swanton. 生歿年未詳。スウィフトの伯父 Godwin Swift の長子 Willoughby の娘。
- (23) Mrs. Moore. 生歿年未詳。1716年に死んだ Drogheda の John Moore 師の未亡人。
- (24) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 254.
- (25) Thomas Lindsay (d. 1724). 1714年から1724年迄 Archbishop of Armagh and Primate of Ireland であった。
- (26) William Lloyd (d. 1716). Bishop of Killala.
- (27) St. George Ashe (c. 1658-1718). Cloyne, Clogher, Derry の bishop を歴任した。
- (28) Peter Browne (d. 1735). Cork と Ross の bishop を歴任した。
- (29) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 263.
- (30) Aix-la-Chapelle. 西ドイツ North Rhine-Westphalia 州にある Aachen のフランス語名。16世紀まで、ここでドイツ王の戴冠式が行われた。
- (31) *The Beggar's Opera*, 1728. ゲイのせりふに John Pepusch (1667-1752) の編曲を添えた ballad opera.
- (32) Newgate. ロンドン旧市街にあった監獄。1902年に取り壊された。
- (33) Lincoln's Inn Fields.
- (34) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, PP. 265-266.
- (35) Thomas Herring (1693-1757).
- (36) *The Intelligencer*. スウィフトとシェリダンの共同で、1728年5月11日、第

1号が発刊になった。

- (37) *A Vindication of Mr. Gay, and the Beggar's Opera.*
- (38) Juvenal (A. D. 60–130). ローマの諷刺詩人。
- (39) Horace (65–8 B. C.). ローマの諷刺詩人。 *Satires* 『諷刺詩集』, *Odes* 『頌歌集』, *Arts Poetica* 『詩論』 などの作品がある。
- (40) *The Dunciad* 『愚人列伝』, 最初の3巻が1728年匿名で刊行された。1735年迄著者名が明らかにされなかった。
- (41) *Swift* Vol. III, P. 564.
- (42) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 303.
- (43) *Swift* Vol. III, P. 567.
- (44) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 259.
- (45) *The Poems of Jonathan Swift* Vol. II, P. 421.
- (46) *A Short View of the State of Ireland.* 1728年5月19日発刊。
- (47) Sara Harding. 既出。
- (48) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 289.
- (49) Sir John Bart Browne of the Neale, Co. Mayo, Ireland (d. 1762). *The Memorial of the Poor Inhabitants, Tradesmen, and Labourers of the Kingdom of Ireland.*
- (50) *An Answer to a Paper Called a Memorial of the Poor Inhabitants, Tradesmen, and Labourers of the Kingdom of Ireland.*, 1728.
- (51) *The Prose Writings of Jonathan Swift* Vol. XII, PP. 22–23.
- (52) *A Modest Proposal*, 1729.
- (53) *The Fates of Clergymen (The Intelligencer*, NOs. V & VII).
- (54) *Corusodes*.
- (55) *Eugenio*.
- (56) *Will's Coffee-house*. Dryden, Pope, Addison, Dr. Johnson などが足繁く通った。
- (57) Armagh. 北アイルランド南東部の州都。
- (58) Market Hill, Co. Armagh.
- (59) Sir Arthur Acheson, 5th Baronet (1688–1749).
- (60) Philip Savage. 生歿年未詳。Chancellor of the Exchequer of Ireland を勤めた。
- (61) *A Letter to a Very Young Lady on Her Marriage*, 1727.
- (62) Deborah Rochfort. 生歿年未詳。
- (63) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, P. 296.
- (64) 1 guinea = 21 shillings.
- (65) *On Cutting Down the Old Thorn*, 1728.
- (66) 花も咲かず実も結ばなくなったサンザンの老木はスウィフトとアチソン夫妻

に次のように憾みがましい言葉をはく。

私を切り倒した首謀者。

悪さをするよう生まれついた情けしらずの首任司祭よ。

私の親族が貴様の皮膚をすりむき、

貴様のガウンと法衣^{カソック}をズタズタにするだろう。

それに、私を火あぶりにしたと

豪語する共謀者のアチソンの奥方。

彼女のペティコートをはきちぎり

彼女の脚を茨でさしてくれよう。

アチソン卿、あなたも見逃すまい。

覆面した暗殺者を寄せつけないように

なんども、あなたに声をかけたが無駄だった。

胸甲斐ないことに、あなたは私が切り倒されるのを見ていたのだから。

(57 — 68)

(*The Poems of Jonathan Swift* Vol. III, PP. 848–851.)

主要参考文献

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).

Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D. D.* (Edinburgh, 1824).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).

Jonathan Swift, *The Intelligencer* (AMS Press, 1967).